

第 1 章 習近平のリーダーシップと政権運営

佐々木 智弘

(日本貿易振興機構アジア経済研究所)

はじめに—3 つの亀裂

2012 年 11 月 16 日、総書記習近平のデビューは印象的だった。内外メディア約 500 人を前にした挨拶で、習近平は高らかに中華民族の誇りを謳い上げ、その一方で中国が解決すべき喫緊の課題である格差と腐敗について率直に語り、その解決を誓ったのである。その姿を見た多くの人々は、10 年前に同じ場で同じようにデビューを飾った際、「マルクス・レーニン主義」や「毛沢東思想」、「『3 つの代表』重要思想」など無味乾燥な言葉を並べた前任の胡錦濤に比べ、この新しいリーダーに大きな期待を見いだしたとしても不思議ではない。

しかし、中国共産党第 18 回全国代表大会（第 18 回党大会）を前に露呈されていたことは、「3 つの亀裂」、すなわち(1)党内の亀裂、(2)党と社会の亀裂、(3)中国と国際社会の亀裂だった。

党内の亀裂は、長期にわたる権力闘争によって党内対立が激しさを増した状況で、党内が疲弊し、正常な政策執行がマヒする政治的不安定をもたらしていた。党と社会の亀裂は、格差問題、汚職問題など急速な市場経済化、高度経済成長のひずみがますます深刻になり、党に対する民衆の不満が大きくなった状況で、社会的不安定をもたらしていた¹。中国と国際社会の亀裂は、欧米との価値観の違い、貿易摩擦、主導権争いなどが深刻な状況で、外交的不安定をもたらしていた。

胡錦濤政権 10 年の前半は高度経済成長期を迎え、国際社会でも発言権を増し米国と対等にわたり合う中国の絶頂期とも言えた。しかし、後半は経済成長が鈍化の気配を見せ、中国は下降線をたどり始めた。その絶頂期を過ぎたところで中央指導者の道を歩み出した習近平は、留まりそうにない下降をいかに阻止するのかという極めて難しい時期に総書記に就任した。その習近平が 3 つの亀裂を修復するためには、強い政治的リーダーシップを確保するほか道はないだろう。

それでは第 18 回党大会の結果は、習近平に強い政治的リーダーシップをもたらすのだろうか。本章では、中央政治局を中心にした人事分析と中央委員会報告（報告）の

¹ 例えば「ここ数年は毎年、各種社会矛盾により発生する群体性事件（集団抗議行動のこと—筆者注）が数万件から十数万件にすら達しており、2012 年の状況も楽観できない」と言われる[陸他主編 2012,13]。

分析から習近平のリーダーシップの今後を展望する²。

I 江沢民人脈の多数抜てきと中央軍事委員会主席の交代

第 18 回党大会後の第 18 期中央委員会第 1 回全体会議（1 中全会）で、総書記に習近平が就任し、李克強も中央政治局常務委員会委員（常務委員）に留任することは既定路線であったことから、その他の常務委員と中央政治局委員（委員）、そして中央軍事委員会主席の人事が焦点となった。

これらの人事をめぐるのは、胡錦濤と江沢民のあいだで激しい権力闘争が展開されたことから、具体的にはそれぞれの人脈を常務委員、委員に何人抜てきできるか、そして胡錦濤が中央軍事委員会主席に留任するかどうかということが注目された³。

なお、ここでのいう胡錦濤人脈とは、中国共産主義青年団（共青团）中央書記処第一書記当時（1984～1985 年）の直属の部下を指す⁴。また江沢民人脈とは、上海市長・同市党委員会書記当時（1985～1989 年）の部下（上海閥）や総書記就任後に江沢民や彼の側近の曾慶紅によって抜てきされた人たちを指す。

1 分析

1 中全会で選出された中央政治局メンバーは表 1 のとおりである。

常務委員には、習近平、李克強、張徳江、俞正声、劉雲山、王岐山、張高麗の 7 人が選ばれた（序列順）⁵。序列 1 位、2 位の習近平、李克強は順当である。3 位以下の 5 人は前期 17 期委員からの昇格であり、年齢的に今期 18 期限りで引退すると見られる。

7 人のうち、李克強と王岐山を除く 5 人は江沢民人脈といえる。習近平は江沢民・曾慶紅の支持を受け、上海市党委員会書記を経て、第 17 回党大会後、次期総書記の座を得た。張徳江は曾慶紅との関係が深い。俞正声は太子党（高級幹部の子弟を指す）

² 筆者は、第 18 回党大会について、直後に分析をそれぞれ行っている[佐々木 2012b;2013]。

³ 2011 年以降の権力闘争の経緯は、佐々木・丁[2011]と佐々木・渡邊[2012]の国内政治の項、佐々木[2012a]を参照せよ。

⁴ 共青团の地方幹部経験者を胡錦濤人脈に含め「共青团派」と一括りにする分類がよく見られる。しかし、筆者は「共青团派」と胡錦濤人脈を区別する（この区別については、[佐々木 2007]を参照せよ）。例えば、共青团安徽省副書記を歴任しただけの汪洋を胡錦濤人脈とは見なさず、むしろ温家宝に近いと見る。

⁵ 選出方法について、「2012 年 5 月に党中央は黨員領導幹部會議を開き、中央政治局委員と常務委員の構成メンバーを新たに指名する予備人選は民主推薦を行った。その結果と組織的な考察の状況、メンバー構成の要請に基づき、メンバー案は繰り返し根回しを行い、何度も意見を聴取し、候補者名簿を提出した」との公式な説明がなされている（『人民日報』2012 年 11 月 16 日）。しかし、民主推薦の具体的な内容は報じていない。

であり、習近平の後の上海市党委員会書記に抜てきされた。劉雲山は江沢民人脈の 1 人李長春の担当した宣伝イデオロギー分野を引き継いだ。張高麗は国有石油企業幹部を歴任しており、曾慶紅同様に石油業界を代表している。他方胡錦濤人脈は李克強 1 人である。李克強は胡錦濤同様に共青团中央書記処第一書記を歴任している。王岐山は太子党であるが、どちらの人脈とも言い切れない⁶。

表 1 中国共産党第 18 期中央政治局メンバー

	第17期	第18期			
役職	氏名	氏名	年齢	兼務	前歴
総書記	胡錦濤	習近平	59	国家副主席・中央軍事委員会主席	浙江省書記→上海市書記
常務委員	胡錦濤	習近平	59	同上	同上
(序列順)	呉邦国	李克強	57	國務院副總理	河南省書記→遼寧省書記
	温家宝	張徳江	65	國務院副總理	浙江省書記→広東省書記
	賈慶林	俞正声	67		湖北省書記→上海市書記
	李長春	劉雲山	65	中央文明建設指導委員会主任・中央書記処書記	中央宣伝部副部長→同部長
	習近平	王岐山	64	党中央規律検査委員会書記・國務院副總理	海南省書記→北京市長
	李克強	張高麗	65		山東省書記→天津市書記
	賀国強				
	周永康				
委員	王剛	馬凱	64	國務委員	国家發展改革委員会主任→國務院秘書長
(画数順)	王樂泉	王滙寧	56	中央政策研究室主任	中央政策研究室副主任→中央書記処書記
	王兆国	劉延東	66	國務委員	中央統一戦線工作副部長→同部長
	王岐山	劉奇葆	59	中央書記処書記・中央宣伝部長	広西チワン族自治区書記→四川省書記
	回良玉	許其亮	62	中央軍事委員会副主席	軍副総参謀長→空軍司令員
	劉淇	孫春蘭	62	天津市書記	中華全国総工会党組書記→福建省書記
	劉雲山	孫政才	49	重慶市書記	農業部長→遼寧省書記
	劉延東	李建国	64	全人代常務委員会副委員長	陝西省書記→山東省書記
	李源潮	李源潮	61		江蘇省書記→中央組織部長
	汪洋	汪洋	57		重慶市書記→広東省書記
	張高麗	張春賢	59	新疆ウイグル自治区書記	交通部長→湖南省書記
	張徳江	範長龍	65	中央軍事委員会副主席	軍総参謀長助理→済南軍区司令員
	俞正声	孟建柱	65	中央政法委員会書記・國務委員・公安部長	上海市副書記→江西省長
	徐才厚	趙楽際	55	中央書記処書記・中央組織部長	青海省書記→陝西省書記
	郭伯雄	胡春華	49	広東省書記	河北省長→内モンゴル自治区書記
	薄熙来	栗戰書	61	中央書記処書記・中央弁公庁主任	黒龍江省長→貴州省書記
	郭伯雄	郭金龍	65	北京市書記	安徽省書記→北京市長
	薄熙来	韓正	58	上海市書記	上海副市長→同市長

(出所) 各種報道より筆者作成 (2012 年 2 月 18 日現在)。

(注) 年齢は 2012 年 7 月時点／「書記」は党委員会書記の略。

⁶ 王岐山は、党の高級幹部だった姚依林の娘婿である。

第 18 期の常務委員が前期と異なる点の 1 つは、定数が 9 人から 7 人に削減されたことである。決定プロセスの簡素化、合理化、比較的高い親密度を有することなど理由付けも見受けられる⁷。しかし、過半数を制する上で削減が有利であると判断する権力闘争過程での戦略とみるのが自然だろう⁸。

もう 1 つは、序列 2 位の兼務が全国人民代表大会（全人代）常務委員会委員長ではなく、国務院総理になることである。このことは序列と兼務の関係が制度化されたものではなく、その時々権力闘争の結果であることを示している⁹。

委員は、馬凱、王滬寧、劉延東、劉奇葆、許其亮、孫春蘭、孫政才、李建国、李源潮、汪洋、張春賢、範長龍、孟建柱、趙樂際、胡春華、栗戰書、郭金龍、韓正の 18 人（ピンインによる画数順で、常務委員 7 人は除く）である。

このうち胡錦濤人脈は、劉延東、劉奇葆、李源潮、胡春華、郭金龍の 5 人である。胡春華は 40 歳代での抜てきとなる。江沢民人脈は張春賢、孟建柱、栗戰書、韓正の 4 人である。この他の 9 人については、どちらか一方の人脈に分類することができない¹⁰。このうち孫政才も 40 歳代での抜てきである¹¹。全体としてバランスが重視されたと見ることができる。

中央軍事委員会主席には、胡錦濤が退任し、習近平が就任した。胡錦濤は総書記就任から中央軍事委員会主席就任までに 2 年を要している。そのため、胡錦濤の留任も十分予想されたことから、先例を覆す退任は少なからず驚きをもって受けとめられた。

2 劣勢を挽回できなかった胡錦濤

以上の分析は、人事が権力闘争の結果であるという視点からのもので、胡錦濤が人事で完敗だったと言っても言い過ぎではないだろう。当然、こうした見方には異論があるだろう。

例えば、新たな常務委員 5 人は年功序列で決まったという見方がある。しかし、それは結果論にすぎず、もしそうならば陣容は 5 年前にすでに決まっていたことになり、権力闘争の必要はない。

また、江沢民が総書記退任後も 2 年間中央軍事委員会主席に留任し、その間党内に

⁷ 例えば、稼勅[2012,6]。

⁸ 過半数を制する上で削減が有利であると判断するのは通常劣勢にある側であり、この場合胡錦濤と推測される。しかし、胡錦濤は 4 人を抜てきすることができるだけの影響力を有していなかったといえる。

⁹ 1997 年の第 15 回党大会以降、序列 2 位は全人代常務委員会委員長を兼務してきたため、国務院総理兼務は第 15 回党大会以前の状況に戻ることになる。

¹⁰ 例えば、王滬寧は江沢民人脈とも言えるし胡錦濤人脈とも言える。

¹¹ 孫政才は、農業博士号を有する農業分野の専門家と見られる。北京市副市長に賈慶林に見いだされたとも、農業分野を担当した温家宝に見いだされたとも言われているが、背景はよく分からない。

は胡錦濤との二重権力が存在したことで、胡錦濤は自らスムーズな政権運営をできなかったことから、習近平のために当初から総書記退任と同時に中央軍事委員会主席も退くつもりだった。そして総書記と中央軍事委員会主席を同時に委譲するという制度化の意図があったという見方がある。

しかし、胡錦濤が中央軍事委員会主席留任を目論んでいたと推測するに足る状況があった。2011 年 2 月の劉志軍鉄道部長解任、2012 年 3 月の薄熙来失脚などの事件は、2002 年の第 16 回党大会での総書記就任以来、江沢民との権力闘争で常に劣勢にあった胡錦濤が挽回を図ろうとしたことと強く関連している。また、江沢民が中央軍事委員会主席留任に向けた動きと同じ様に、胡錦濤も 2011 年 1 月から「全軍が国防と軍隊建設の科学的発展を推進することを主題とし、戦闘力の生成モデル転換の加速を主線とすること」という中央軍事委員会主席としての成果をテーゼ化する動きを見せていた¹²。また第 18 回党大会直前の 10 月 25 日に中央軍事委員会弁公庁主任の王冠中が副総参謀長に異動したことが明らかになり¹³、後任に胡錦濤国家主席弁公室主任の陳世炬が就任したという憶測記事が流れたことも留任の布石とみられた¹⁴。後に 10 月 20 日に曹育民が就任していたことが確認されたが、少なくともその時期に胡錦濤の留任をめぐり駆け引きが繰り広げられていたことを強く推測させる¹⁵。

しかし、劣勢を挽回しようという胡錦濤の目論見は失敗に終わり、胡錦濤の党内での影響力はさらに低下した。その結果、常務委員に李源潮、委員に（中央弁公庁主任を歴任した）令計劃¹⁶という腹心を抜てきすることはできなかった。そして胡錦濤自らも中央軍事委員会主席に留任することができなかった。

こうした結果に対し、江沢民と胡錦濤の痛み分け、胡錦濤の勝利という見方もある。その根拠は、胡錦濤があえて常務委員のほとんどを江沢民人脈に譲り、委員に 5 人の胡錦濤人脈を配置することで、5 年後に彼らを次期第 19 期常務委員に昇格させ、多数派を形成しようとする戦略に転換したというものである。仮に胡錦濤がこうした戦略転換を行ったのだとしても、その実現は難しい。これについては後述する。

他方、人事での胡錦濤の完敗は習近平の勝利を意味するわけではない。なぜならば、習近平の人脈が抜てきされていないからで、習近平の意向はほとんど考慮されていないように思われ、江沢民と曾慶紅を中心に人事が決まった感がある。習近平からす

¹² 筆者は、『解放軍報』2011 年 1 月 1 日の社説で、この主題主線論を初めて目にした。

¹³ 人民網 2012 年 10 月 25 日

<http://military.people.com.cn/n/2012/1025/c1011-19385277.html>

¹⁴ 多維新聞網 2012 年 10 月 28 日

<http://china.dwnews.com/news/2012-10-28/58930080.html>。実際に江沢民は留任の際、国家主席弁公庁主任の賈安廷を中央軍事委員会弁公庁主任に異動させている。

¹⁵ 軍人事の分析は、第 4 章阿部論文を参照せよ。

¹⁶ 江沢民が総書記に就任した 1989 年 6 月以降に中央弁公庁主任を歴任した温家宝、曾慶紅、王鋼は退任後、委員以上に昇格している。

れば、江沢民と曾慶紅の支持により 5 年前に総書記候補のポストを手に入れることができたことから、彼らに従わざるを得なかったと推測される。

3 党内の一体化

こうした権力闘争は、とりわけ薄熙来失脚事件に見られるように、第 18 回党大会が近づくにつれ激しさを増し、党内の亀裂を深いものにした。その結果である人事に対し、習近平は 11 月 15 日の 1 中全会で、「党と人民の事業を受け継ぎ、将来の発展に道を開くため、胡錦濤同志および呉邦国、温家宝、賈慶林、李長春、賀国強、周永康同志は先頭に立って党中央の指導ポストから退き、崇高な品格と高尚な気風を示した。われわれはこれに崇高な敬意を表します」と述べた（『人民日報』2013 年 11 月 16 日）。

また同月 16 日の中央軍事委員会拡大会議でも習近平は「胡主席は党、国家、軍隊事業の発展の全局から考慮して、自発的に総書記、中央軍事委主席の職務を再任しないことを提出した。第 18 回党大会と第 18 期 1 中全会は胡主席の希望を尊重し彼の要請に同意した。胡主席のこの重大の決定は、彼の党、国家、軍事事業の発展に全局に対する深い思考を十分示し、彼のマルクス主義政治家、戦略家としての遠大な見識、広い心と高潔な人格、高尚な品格と硬い気風を十分示した」と述べた（『人民日報』2013 年 11 月 18 日）。

このように習近平は、胡錦濤に深い感謝の意を述べ、胡錦濤からの権力委譲を平和的なものに演出した。それは、胡錦濤が「自発的に」中央軍事委主席のポストを譲ったという美談に仕立てただけではなく、党内の亀裂を覆い隠し、一体化を装うためでもあった。

II 党大会報告の分析

習近平は 2008 年の第 17 回党大会¹⁷で次期総書記の切符を手にしてからの 5 年間、政権構想について多くを語ってはいない¹⁸。その意味で今後の政権運営については未知数である。それにもかかわらず、人々の就任直後からの習近平への期待は前任の胡錦濤が期待外れだったことの裏返しの部分が多い。習近平はどのような政権運営を目指そうとしているのだろうか。

第 18 回党大会における報告を読み上げたのは胡錦濤だったが、実際には習近平政権の所信表明の意味合いをもつ。以下、報告の分析を手がかりに、習近平の政権運営のヒントを見いだすことにする¹⁹。

¹⁷ 第 17 回党大会の分析については、佐々木[2008]。

¹⁸ 例えば、第 12 次 5 カ年計画は数少ない 1 つだろう[佐々木 2011]。

¹⁹ 報告は胡[2012]による。

1 胡錦濤政権 10 年への分かれる評価

報告は胡錦濤政権が残した問題点として、次の 6 項目を挙げた。

(1)発展におけるアンバランスや調和の欠如、持続不可能の問題が依然として際だっており、科学技術革新の能力が強くなく、産業構造が不合理であり、資源・環境面の制約がいつそう厳しくなり、科学的発展を束縛している体制・仕組み上の障害がかなり多く、改革・開放を深め、経済発展方式を転換する任務は極めて重い

(2)都市と農村、地域間の発展の格差と人々の所得配分面の格差

(3)社会的矛盾が明らかに増え、教育や雇用、社会保障、医療衛生、住宅、生態環境、食料品・医薬品の安全、労働安全、社会治安、法律執行・司法など大衆の切実な利益に関わる問題はかなり多く、一部の人々の生活は比較的困窮している

(4)一部の分野では、モラルの規範から外れ、信義誠実にもとるケースも見られる

(5)一部の幹部は科学的発展を指導する能力が高くなく、末端における一部の党組織は軟弱でまとまりに欠けており、少数の党員幹部は理想が揺らいだり、党の宗旨に関する意識が薄れたりして、形式主義・官僚主義が目立ち、贅沢三昧や浪費の現象が深刻化している

(6)一部の分野では、消極・腐敗現象が発生しやすく、多発しており、反腐敗闘争の情勢は依然としてかなり厳しい。

この 6 項目のほとんどが、格差と汚職に関連している点が特徴である。党と社会の亀裂の深刻な状況を反映した問題提起と言える。

他方、新華社や『人民日報』など官製報道は、第 18 回党大会前に胡錦濤政権の 10 年の成果を「輝かしいもの」として連日大絶賛する特集を並べた²⁰。

その上で、この 6 つの問題点の提起をどう評価すべきだろうか。これは胡錦濤政権が最善を尽くしてもなお解決できなかった問題点と言えるのだろうか。

胡錦濤政権 10 年への手厳しい批判も少なくなかった。例えば、市場経済推進を積極的に唱える著名なエコノミストである呉敬璉によるものである。呉敬璉はある講演会で「2002 年の胡錦濤政権発足後も『社会主義市場経済体制改革の完備に関する若干の問題の決定』で多くの改革措置が提起されたが、『決定』にあった進めるべき改革のほとんどが何もしなされていない」と厳しく批判した²¹。胡錦濤政権はこの 10 年で何もやらなかったという評価なのである。

²⁰ 例えば、新華社は 2012 年 6 月 3 日から「科学発展、光輝成果」の連載を、『人民日報』は同年 8 月 1 日から『十八大特刊』の連載を開始、第 18 回党大会直前まで続いた。

²¹ 『第一財經日報』2011 年 11 月 14 日。この他『京華時報』2011 年 11 月 11 日、『人民日報』2011 年 11 月 28 日などにも呉敬璉の批判が掲載された。とりわけ『人民日報』が掲載したことは留意すべきである。具体的な社会保障制度改革への評価については第 5 章澤田論文を参照せよ。

2 「中国の特色を持つ社会主義」

これら問題点を踏まえ、報告では習近平政権が取り組むべき課題が提起されるのだが、その前段に「中国の特色を持つ社会主義」について 1 つの節が設けられたことは注目に値する。

「中国の特色を持つ社会主義」は、鄧小平が 1980 年代に提起したもので、第 16 回と第 17 回の党大会報告でも取り上げられており、決して新しい言葉ではない。第 17 回党大会報告では、(1)「中国の特色を持つ社会主義の道」(道路)、(2)「中国の特色を持つ社会主義の理論体系」にまとめられた。これに第 18 回党大会報告では、(3)「中国の特色を持つ社会主義制度」が加えられ、「三位一体」が強調された。これは社会主義に代わる「イデオロギー」としての完成度をさらに高めたことを意味する。

ここで「中国の特色を持つ社会主義」の内容について深入りすることは意味がない。ただ、社会主義が高い理念を掲げたのに対し、「中国の特色を持つ社会主義」は実績を掲げたものである。1949 年 10 月以降の最高指導者による一様ではない政権運営を、すべて「正しかった」と賞賛し続けることで、その時々政権は一党支配を正当化し維持してきたのである。

しかし、実際にこの「イデオロギー」は具体的な問題を何ひとつ解決してこなかった。ただ共産党とは異なる選択肢を封じ込めるための権威の象徴でしかなかった。

その「イデオロギー」である「中国の特色を持つ社会主義」を報告が 1 節を設けて取り上げたことには、重要な意図があると考えられるべきであろう。1 つには習近平も実績を掲げることで一党支配を正当化するやり方を踏襲することを宣言したといえる。もう 1 つは、共産党と社会の亀裂を統制によって修復する意思を示したことである。そして最も重要なことは、党内の亀裂に対して「中国の特色を持つ社会主義」のもとの思想統一を図り、一体化を装うためである。

3 党と社会の一体感

次に報告が掲げた習近平政権の取り組むべき課題や目標を見ておこう。

中国の特色を持つ社会主義の新たな勝利を獲得するために堅持すべき「基本的な要求」として、以下の 8 項目を挙げた。(1)人民の主体的地位、(2)社会的生産力の解放と発展、(3)改革・開放の推進、(4)社会の公平・正義の擁護、(5)共同富裕の道を歩むこと、(6)社会の調和の促進、(7)平和発展、(8)党の指導。この 8 項目のうち半分に当たる 4 項目((1)、(4)~(6))は、人民を重視するという点で、ほとんど同じ内容の繰り返しになっている。このことも、共産党がいかに社会との亀裂を深刻に受けとめているかを示している。

小康社会を全面的に作り上げるために応えるべき新たな要請として、以下の 5 項目を挙げた。(1)経済が持続的で健全に発展していくこと、(2)人民民主が絶えず拡大する

こと、(3)文化のソフトパワーが著しく強まること、(4)人民の生活レベルが全面的に向上すること、(5)資源節約型社会、環境にやさしい社会の構築が大きな進展を遂げること。基本的には胡錦濤が掲げた「科学的発展観」に内容とほぼ一致している。このうち、(1)には「2020 年の都市・農村住民 1 人当たりの所得・収入を 2010 年の 2 倍にする」との目標値が掲げられた。第 17 回党大会報告では、1 人当たり GDP の目標が掲げられたが、今回 GDP だけでなく、民衆により身近な 1 人当たり住民の所得・収入を目標に掲げたことは、さらに社会との一体化を図ろうという意図がある。

政治体制改革も基本的に胡錦濤政権が提唱したことが継承されている。しかしその中で、「協商民主」という言葉が初めてお目見えした。これは「国家政権機関や政協組織、党派・団体などのチャンネルを通じて、経済社会発展の重大問題や大衆の切実な利益に関わる現実的な問題について、幅広く話し合い(協商)、人民の意見を広く聴取し、人民の英知を広く取り入れ、共通認識を深め、合力を増強させる」ことと説明されている。民衆が参加する話し合いにより問題解決、政策選択をしようという政治参加を促す制度である。

党建設では「党内の選挙制度を完全なものにして、差額方式による候補者指名・選挙を規範化し、選挙者の意思を十分に反映する手続きと環境を作り出す」として、選挙の「差額方式」(定数以上の複数候補者から選出する方式)を初めて明記した。

ある程度社会的寛容さ、政治的な一体感を増大しなければ、民衆の支持を得られないという認識によるものである。

Ⅲ 習近平のリーダーシップへの期待

冒頭で述べたように、習近平には強いリーダーシップが求められている。他方、中国について、中長期的な見通しに対する関心は高いが、それを見通すことは難しく、あまり意味をなさない²²。むしろ、5 年ぐらいをメドとする短期的な見通しを考える方が現実的であり、そのたびに修正が可能である。そのため、本節でも次期党大会までの習近平がリーダーシップを確保し、発揮できる可能性を見通すこととしたい。

1 習近平と胡錦濤の共通点

胡錦濤は、共青团のトップを経て、建国以前の革命期や分属大革命期のような政治闘争の過酷さも知らず、鄧小平の「鶴の一声」で次期総書記候補として常務委員入りし、総書記の座を手にした。その意味で、「エリート中のエリート」だったのである。

他方、習近平には、文化大革命により下放された陝西省農村から政治人生をスター

²² とりわけ 1989 年 6 月の天安門事件以降、たびたび一党支配体制崩壊論が世をにぎわしているが、一党支配体制は現在も健在である。

トさせた苦勞人という胡錦濤とは対称的なサクセスストーリーが描かれている²³。しかし、太子党であるが故に、下放先でも農村幹部に抜擢され、その後も福建省、浙江省、上海市の指導者を歴任する出世コースを歩み、5 年前に次期総書記候補として常務委員入りした。習近平も「エリート中のエリート」である。

胡錦濤も習近平も共産党の一方支配の「枠」という既存の政治体制の中で総書記の座に就いたという点は共通である。

2 困難な利害調整

習近平は、前回の第 17 回党大会で江沢民人脈や軍、曾慶紅がまとめた太子党、国有企業経営者らの支持を受けて、次期総書記候補に選ばれたと見られる。そのため、総書記に就いた習近平は今後支持基盤に対し利益を還元しなければならない。まさに「利益誘導政治」が展開されるわけである²⁴。しかし、この習近平の支持基盤は必ずしも一枚岩ではなく、それぞれの利益は異なる。彼らの既得権益を守ることは格差や腐敗の問題解決と相反する点も少なくない²⁵。そのため、胡錦濤政権以上にその調整に困難を要するだろう。

また彼らにとって誰が自らの既得権益を守ってくれるかが重要であるが、5 年前にそれが李克強よりも習近平であると判断したのは、相対的なものに過ぎないため、習近平の支持基盤は脆弱である。

支持基盤を優先するか、それとも党と社会の亀裂の修復を優先するか。習近平は選択を迫れることになるが、安定重視を大前提とし、改革よりもむしろ統制重視の政権運営にならざるを得ない。

さらに、5 年後には次期総書記候補を決定するだけでなく、引退する常務委員 5 人のポストをめぐつても権力闘争は今後、年を追うごとに激しくなるだろう。このとき、党内の亀裂が拡大するのか、新たな亀裂を生むのか。読むのは難しい。

3 習近平の有利

しかし、そうした悲観論ばかりではない。習近平が胡錦濤や江沢民に比べ、リーダーシップを発揮する上で有利な条件を手にして、政権をスタートさせることができたことも事実である。

²³ 習近平を含む第 18 期常務委員 7 人に共通する特徴として、「豊富な末端での活動経験」が指摘されている[稼鞠 2012,6]。

²⁴ 筆者は、第 17 回党大会終了後の分析で、利益誘導型政治の到来を指摘している[佐々木 2008]。

²⁵ 例えば、報告は「経済体制改革の核心的問題は、政府と市場の関係をうまく処理することである」としながらも、「公有制経済の強化と発展は不変」としており、国有企業や政府の役割が、非公有制企業や市場よりも優先される記述になっている。

第 1 に、習近平は、5 年前に民主推薦²⁶という手続きを経て総書記の座を射止めており、鄧小平の「鶴の一声」で総書記に就いた江沢民や胡錦濤とは異なる正当性を有している。

第 2 に、総書記就任時に、中央軍事委員会主席のポストも手に入れ、2013 年 3 月には国家主席への就任も予定されている。そのため、政権発足とほぼ同時に党、軍、国家の 3 つの権力ポストを手にすることができた。とりわけ総書記と中央軍事委主席のポストを同時に手に入れることは想定外だったと思われる。過剰とも思える敬意を胡錦濤に表したのも当然といえるだろう。

第 3 に、江沢民人脈の常務委員 5 名は 5 年後に引退が確実であり、構成メンバーのコマが尽きた感がある。また胡錦濤は 2013 年 3 月に国家主席と国家軍事委員会主席を退任することで、すべての公職から離れることになる。しかも常務委員に胡錦濤人脈が李克強 1 人しかいないこと、胡錦濤には中央政治局内に「江沢民にとっての曾慶紅」のような人事を任せることができる部下がいないことから、ポストのない胡錦濤が次期党大会に向けてかつての江沢民のような影響力が発揮できるかどうかは疑わしい。そのため、今後、共産党内における江沢民と胡錦濤の影響力は小さくなっていくと考えられる。

その中では、権力構造の再編は避けられず、その場合習近平が主導権を握り、福建省や浙江省、上海市などの指導者在任当時の人脈を登用していくことになる。すでに秘書役である中央弁公庁主任には関係の深いとされる栗戦書を充て、しかも委員にも抜擢している²⁷。江沢民と胡錦濤は総書記就任後、それぞれ側近の曾慶紅と令計劃を同主任に充てるのに 4～5 年を要した。しかも同主任就任時に委員に抜擢することはできなかった。

今後、残された胡錦濤人脈と江沢民人脈はさらなる昇進のために習近平の意向を無視することはできない。それは次期総書記候補として注目される若い胡春華も孫政才も同じである。そこからはまったく新しい権力構成が生まれてくる可能性が高い。

²⁶ これについては、佐々木[2008,24-25]を参照せよ。

²⁷ 習近平と栗戦書が近い関係にあることの根拠は、習近平の河北省正定県の幹部在任期（1982～1985 年）と栗戦書の同省無極県の幹部在任期（1983～1985 年）が重なっている。両県は石家庄地区に属し、中心地の距離が 30 キロメートルと隣接していたことから、当時から交友関係があったという（例えば、『明報』2012 年 9 月 6 日）。しかし筆者は本稿執筆時までに、栗戦書が中央弁公庁主任に任命されるという憶測記事が出始めた 2012 年 8 月以前に公表された書籍や報道の中から、習近平と栗戦書の関係についての記述を見つけることはできていない。そのため、両者が近い関係にあるという指摘の信憑性には一抹の疑問を持っている。しかし、江沢民と温家宝（江沢民が総書記就任時の中央弁公庁主任）、胡錦濤と王鋼（胡錦濤が総書記就任時の中央弁公庁主任）に比べれば、習近平と栗戦書が近い関係にある可能性を示す状況証拠であることを否定はできない。

すでにそうした兆候が見られることには注視すべきである。第 18 回党大会後の 11 月 16 日に開かれた中央政治局会議で行ったと思われる重要講話の中で習近平は、「科学的発展観」に言及したのは 4 回だったのに対し、「中国の特色を持つ社会主義」には 14 回も言及した（『人民日報』2012 年 11 月 20 日）。また、胡錦濤の総書記と中央軍事委員会主席の退任に対し、習近平が過剰な敬意を表したことは、胡錦濤からの決別を表明しているとも言える。さらに、12 月 4 日の中央政治局会議で提起された工作作风、群衆との密接な関係の改善に関する 8 項目の関連規定も、過去に何度も提起されながら改善することが難しいことは明らかであることから、その意図は作风の改善それ自体になるのではなく、習近平を中心とする党の一体化とそれに抵抗する反対派の追放にある²⁸。習近平は早くも脱胡錦濤を掲げ、党内に自分への忠誠を求める動きに出ている。

4 短期的な安定性

習近平政権のリーダーシップが期待されるのは、胡錦濤政権が解決できなかった課題への取り組みである。その課題は、解決方法によって、大きく 2 つに分類できる。

1 つは、一党支配の「枠」に付け足す、修正にとどまる課題である。例えば、格差縮小のための社会保障や所得引き上げなど民生分野の改善や都市化などが該当する。

もう 1 つは、一党支配の「枠」を壊す必要のある課題である。例えば、共産党の権力を監督するための政治改革である。

前者の課題には、胡錦濤政権のやり残した余地が大きい。その原因の 1 つは、胡錦濤のリーダーシップの欠如にあると思われる。政策の策定過程、実施過程で胡錦濤が軍や国有企業、主力産業などの既得権益層の抵抗を排除することができなかった。先述の通り、習近平政権になったからといって、既得権益層が消滅するわけではない。しかし、リーダーシップを発揮できる有利な条件を有する分だけ習近平は、胡錦濤に比べると、抵抗を排除することが可能になり、成果が期待できる。

他方、後者の課題に取り組むことは、習近平でも難しいだろう。なぜならば、習近平も江沢民や胡錦濤と同様に、一党支配の「枠」の中から誕生した総書記だからである。そのため、習近平が一党支配の「枠」を壊すような政治改革、例えば選挙制度の導入や司法制度改革、メディア改革を行うことは考えられない。

例えば、先述の「協商民主」は、そもそも西側の選挙による政策選択である「選挙民主」のアンチテーゼとして提起されたものであり²⁹、しかも「国の政権機関や政治

²⁸ こうした作风の改革は、毛沢東、鄧小平、朱鎔基、胡錦濤も提起している。

²⁹ 房寧「『協商民主』は中国の民主政治発展の重要な形式」（人民日報日本語版 2010 年 1 月 6 日 <http://j.people.com.cn/94474/6861015.html>）。房寧は中国社会科学院政治学研究所所長であり、「協商民主」を積極的に推奨する。

協商組織、党派、団体などのチャンネル」といった既存のチャンネルに限定されている。また党内選挙での差額選挙方式も、政策を選ぶのではなく、人を選ぶ選挙にすぎない。

報告で言及された「党の指導を堅持し」、「西側の政治制度のモデルをそのまま引き写しにしない」ということは、党中央が政治改革において越えてはならないラインとしての認識を示している。それは、「政治協商」のせよ、「差額選挙」方式にせよ、党中央が認識する一党支配の「枠」内での政治的寛容性の範囲内にあるということである。

中国が一党支配体制という世界でも特異な政治体制であることから、政治改革には常に注目が集まる。しかし実際に中国国内で一党支配の「枠」を壊すような政治改革を求める声はまだ大きくない。

一党支配の「枠」を修正するだけの余地はまだ大きい。胡錦濤がやり残した課題に、習近平がリーダーシップを発揮し取り組むだけで、多くの民衆は習近平政権を評価し、党と社会の亀裂を修復することは可能である。そのため、短期的、今後 5 年ぐらひは、習近平政権は安定を勝ち取ることが可能である。

そして修復を進め、支持を得て、政権基盤を再編し強化しながら、他方で「枠」を壊す必要のある課題について、どう対応するかを考えればいい。習近平は、胡錦濤政権 10 年の失政のおかげで、「猶予」期間を手にしたといえるかもしれない。

[参考文献]

〈日本語文献〉

- 佐々木智弘 2007. 「共青团幹部経験者と胡錦濤の権力基盤」『東亜』No.481、2007 年 7 月号、20-27 ページ。
- 2008. 「前途多難な胡錦濤の政権運営—誤算の人事と「科学的発展観」の限界」大西康雄編『中国調和社会への模索—胡錦濤政権二期目の課題』日本貿易振興機構アジア経済研究所、1998 年、15-35 ページ。
- 2011. 「特集にあたって：中国の今後を読むために—中国総合展望研究の活かし方」『アジ研ワールド・トレンド』2011 年 1 月号、No.184、2-3 ページ。
- 2012a. 「ON THE RECORD 党大会を控えた中国の政治状況」『東亜』No.542、2012 年 8 月号、10-17 ページ。
- 2012b. 「習近平氏に改革の期待 一党支配の枠壊せるか」『Kyodo Weekly』2012.12.17、No.51/2012、8-9 ページ。
- 2013. 「第 18 回党大会後の政治の行方」『日中経協ジャーナル』2013 年 1 月号、No.228、10-13 ページ。

佐々木智弘・丁可 2011. 「2010 年の中国 世界第 2 の経済大国へ」 アジア経済研究所編『アジア動向年報 2011』日本貿易振興機構アジア経済研究所、97-132 ページ。
佐々木智弘・渡邊真理子 2012. 「2011 年の中国 政権交代を前に経済成長が鈍化」 アジア経済研究所編『アジア動向年報 2011』日本貿易振興機構アジア経済研究所、95-130 ページ。

〈中国語文献〉

陸学芸・李培林・陳光金主編 2012. 『社会藍皮書 2013 年中国社会形勢分析与預測』社会科学文献出版社。
胡錦濤 2012. 『堅定不移沿着中国特色社会主义道路前進為全面建成小康社会爾奮闘—在中国共產党第十八次全国代表大会上的報告(2012 年 11 月 8 日)』人民出版社。
稼勅 2012. 「習近平時代開創未来」『広角鏡』12 月、6-11 ページ。